

# 安藤更生によるミイラ研究資料

棕 橋 彩 香

## はじめに

2019年5月、早稲田大学會津八一記念博物館（以下、当館）に安藤更生旧蔵ミイラ研究資料の閲覧依頼があった。依頼主は、ドイツの公的文化機関ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川（旧称：京都ドイツ文化センター）にレジデンスプログラムで招聘され日本に滞在していた、ドイツ人美術家／映像作家のアン・ラファン氏である。アン・ラファン氏は5月中旬～8月初旬までの滞在で即身仏に関するリサーチを行い、そのなかで当館での「日本の即身仏の学術調査資料」の閲覧を希望した。その折に、これまで未公開であった安藤更生によるミイラ研究資料のデータ化を行った。ついては、本稿にてその要旨を報告することで、諸氏の研究に資することとなれば幸いである。

## 1. 安藤更生によるミイラ研究

安藤更生（1900–1970、以下安藤）は、早稲田大学において會津八一を師と仰いだ美術史研究者、および早稲田大学教授である。奈良・中国美術研究をはじめ、日本各地の地方文化財の美術、考古調査や日本・中国の書法史研究、鑑真研究、ミイラ研究など、極めて多岐にわたる領域の研究を残した。安藤が旧蔵していた資料などは、ご親族の厚意により2010年以降、複数回にわたって当館に寄贈された。当館ではこれを「安藤更生コレクション」と称し、2016年には受贈記念と題した企画展「會津八一と安藤更生——學藝の継承」を開催している。

数ある安藤の研究のなかでも、特筆すべき業績のひとつがミイラ研究である。安藤は1959年頃よりミイラ研究に邁進することとなるが、先んじてミイラに興味を抱いたのは昭和の初め頃であった。早稲田大学文学部講師であった板橋倫行より鈴木牧之『北越雪譜』を勧められ、西生寺の弘智法印（新潟県長岡市）の存在を知った。この弘智法印は、師・會津も若い頃に実見したことがあると話していたという。このような経緯により、安藤は日本にもミイラが現存する旨を知ることとなった。

以降、安藤はミイラへの興味を持ち続けていたが、本格的にミイラ研究に取り組むこととなったのは先述のとおり1959年のことであった。この年の7月、先の弘智法印の調査が行われ、翌年7月には「出羽三山ミイラ学術調査団」、続いて「日本ミイラ研究グループ」が組織された。当時、日本におけるミイラの実態はほとんど明らかにされておらず、安藤を中心として行われた一連のミイラ学術調査は注目を集め、その動向は連日のように新聞や週刊誌に報道された。

安藤によるミイラ研究においては、①文化史的研究、②自然科学的研究、さらに③宗教民俗学的研究の三側面からのアプローチがなされた。それぞれ、①文献に現れた日本人のミイラに関する風習を尋ね、次いで現存する湯殿山系を主とするミイラに関する情報を蒐め分析し、入定ミイラの製成法を究める、②計測、計量、診察、レントゲン撮影による観察、その他によって、遺体の実態、病歴、個人的特徴を把握し、併せてミイラ製成法の探求にも

資する、また今後の保存法をも立案する、③入定に由来する弥勒信仰並びに修験道との関係を明らかにし、湯殿山系ミイラ信仰の依って来ったところ、およびその民間信仰上の位置を明らかにする、という趣旨のもと進められた（「はじめに」『日本ミイラの研究』、pp.5-6）。

また、安藤は自身の研究対象を次のように定義している。すなわち、「本人がミイラになることを希望したか、あるいは他人がミイラにしようとしてなんらかの処置を遺骸に施した結果出来たミイラ」である（『日本のミイラ』p.12）。この種のミイラは、そのほとんどが篤い仏教的信仰を伴っている点で共通する。したがって、自然に生成されたミイラや死蝋は対象に含まない。

安藤によるミイラ研究の成果としては、単著『日本のミイラ』（毎日新聞社、1961年）、また日本ミイラ研究グループ編『日本ミイラの研究』（平凡社、1969年）などが挙げられ、本稿で紹介する資料はその基をなしたものであると理解されたい。

## 2. 資料概要

当館にて所蔵するミイラ研究資料は次のとおりである。

- ・出羽三山ミイラ学術調査日程表（昭和三十五年度）
- ・調査寺院リスト
- ・ミイラ調書（ただし安藤の直筆ではなく、他者によって清書されたもの）
- ・ミイラ関係文献ノート
- ・ミイラ調査に関連する書簡類
- ・ミイラ調査に関連する新聞・雑誌切り抜き類
- ・ミイラ随筆メモ（原稿用紙2枚）
- ・ミイラ調査関連写真およびスライドフィルム（鉄竜海上人8枚、鉄門海上人4枚、真如海上人7枚、円明海上人および関係文書2枚、忠海上人1枚、舜義上人5枚、仏海上人14枚、石頭和尚1枚、他）

本稿では上記のうち、①「出羽三山ミイラ学術調査日程表（昭和三十五年度）」、②「ミイラ調書」、③「ミイラ関係文献ノート」について、次章で翻刻した（文中の旧字、異体字、略字等は原文ママとした）。なお、②中の「Ⅷ 富田子之吉」は死蝋であり先述の研究対象には漏れるが、調書に含まれているためそのまま掲載した。また、「ミイラ調査関連写真およびスライドフィルム」については、すでに全資料がデータ化済みである。

## 3. 資料内容

### ① 出羽三山ミイラ学術調査日程表（昭和三十五年度）（1961年）

出羽三山ミイラ学術調査日程表（昭和三十五年度）

七月三日(日) 安藤・桜井先発・上野発九・三五（山形市後藤旅館）

七月四日(月) 県庁その他連絡・全員夕刻までに鶴岡駅前庄内ホテル集合・夜、打合会を開く（鶴岡市庄内ホテル）

七月五日(火) 南岳寺（鶴岡市白銀町）一体（々）

七月六日(水) 朝市役所、ジープにて本明寺に至る

本明寺（東田川郡朝日村東岩本）一体 夕方注連寺に至る（朝日村大綱注連寺）

七月七日(木) 注連寺（〃大綱）一体（〃）  
七月八日(金) 朝徒歩にて大日坊に至る（三〇分位）器材はリヤカーにて運搬  
大日坊（東田川郡朝日村大綱）一体  
夕方、貸切バスにて酒田市に直行（酒田市海向寺）  
七月九日(土) 海向寺（酒田市下台町）一体（〃）  
七月十日(日) 〃（〃）一体（〃）  
七月十一日(月) 解散・残務整理

#### 調査員

早稲田大学教授 文学博士 安藤更生（美術史・歴史）…代表者  
新潟大学教授 医学博士 山内竣呉（人類学）  
新潟大学教授 医学博士 小片 保（人類学）  
新潟大学助教授 医学博士 茂野録良（法医学）  
東北大学教授 文学博士 堀 一郎（宗教学）  
早稲田大学東洋美術研究室 長島 健（美術史・歴史）  
早稲田大学講師 櫻井清彦（考古学）…事務担当  
鶴岡高等学校教諭 戸川安章（歴史）、松本 昭（美術史・歴史）事務担当  
その他、助手一本間隆平、レントゲン技師一庄内病院熱田、力石両氏、写真技師、学生二名  
オブザーバーとして 井上 靖氏

#### 調査団事務所

東京都新宿区戸塚町一丁目 早稲田大学  
會津記念東洋美術陳列室 内  
電話（341）二一四一～四五（内線 三二八）

## ② ミイラ調書（1959～1961年）

### I 弘智法印

#### 1. 保存状態

極めて不良なり。頭部は軟部の乾燥したものが附着せるも顔面では殆ど脱落している。項部より背部、後腹部にかけての皮膚及び軟部は比較的保存良好なるも、胸、腹部より骨盤部にかけては腐蝕せられている。左肩関節を除き、他の関節は離断している。上肢は漆その他で補修されて一応の形をとっている。腕関節以下は割合によく保存されていて指関節の脱落を除けば合掌の崩れた形となる。

#### 2. 外皮一般

黒褐色を呈している。上肢の一部は赤褐色の部分も見られる。黒灰色の部分もある。頭部は特に茶褐色を呈している。外皮に索溝を見ない。

### 3. 身長、体重

レ線写真によれば160.369cmであり、日本人としては普通よりやや低め、上肢の発達に比して下肢のそれが非常に強大である。体重は不明。

### 4. 頭頸部

頭骨最大長 192.5mm (推)	} 頭骨長幅示数 73.4
頭骨最大巾 141.3mm (推)	

最大巾は余り大とは言えぬが、最大長が長いので長頭に屈している。

顔高118.1mmで現代日本人より短かめであるが、中世鎌倉人及びそれより以前の日本人より少し長い。頭の高さは可成り高い。頬骨弓幅137.2mmこれは少し広い方に屈し、顔が横に幾分広い事を示す。下顎角幅92.7mm割合小さい値である。要するに頭の長さが長く、顔は横に張るが顎の張りは少ない顔である。男性らしい顔であるが端正であつたろう。

脳頭蓋の内容は見られない。上下顎の大臼歯は恐らく齲歯の後に脱落している。右頭頂骨後方に約長径14mm、短径9mmの楕円形の石灰沈着せるもの7個を見る。原因不明

このような石灰沈着を右眼窩の下壁にも1個見られる。頭部は前方に傾斜しているが、頸椎は余り曲っていない。頭蓋の冠状、人字縫合はまだ癒着を終わっていない。

### 5. 胸、腹、骨盤部

破損が強い部分である。脊柱は弓状にまがっている。内容は殆ど無く、特に骨盤部の軟部は殆ど見られぬ位破損つよし。

左右肩甲骨の恐らく前面に頭蓋内に見られた様な楕円形の石灰沈着せるものが見られるがっしりした骨組の人である。老人に見られる腰椎に変形性脊椎症の所見がある。

### 6. 上肢

肩関節は左側のみ、健で軟部によって附着するが右側及び肘関節は既に脱臼し、補修によって形成されている。右肘関節80°で手部が上っている 左55°である。

以前は手指を組んでいたと思うが現在では外れている。手指骨も離れているものが多く、既に失われている。上肢骨は余り頑丈とは言えず、寧ろ繊細とも考えられる。

### 7. 下肢

股関節、膝関節は全く外れている。足関節以下は一部を残して殆ど消失。全般にわたり、強大で且つ長。これが大なる特徴になっている。

### 8. 血液型及び指紋（皮膚理紋条）

指紋その他は全く採取不能。血液型は AB 型である事は既に報告の通り。

### 9. 備考

弘智法印は修理に行く積りでいたので、よく観察していない。

66～7才位とすれば縫合の癒着がまだ完成していないので一寸疑問はあるが、歯の所見では可成り老人である事が知られる。

上肢の発達に比して下肢の発達が強いことに注意せねばならぬ。ミイラ作製に於ける加工が行われたか否か不明である。

## II 鉄龍海上人

### 1. 保存状態

加工が行われている爲に極めて良好である。顔面部の一部、床部に密着する部分は虫害あるも一般には保存良好である。

### 2. 外皮一般

黒褐色を呈する事、外の場合と同様、顔面部は黒色に近い。併し外皮全体に塗布した形跡は無い。

### 3. 身長及び体重

161.33cmとなる。上肢及び下肢の発達よく、その発達に余り差が無い。体重15kg……胸、腹、骨盤腔内に充填した石灰のために重し。

### 4. 頭頸部

左眼窩の内容物は無い。右眼瞼は閉じて眼球も残存していると思うが、この眼瞼表面に藍色の塗料があたかも眼球の如く塗布してある。

頭蓋頭頂部の一部が隆起して一丘を作っている。頭髮及び髭が残存している。

頭骨最大長	178	}	頭骨長幅示数	79.2
頭骨最大幅	141			

長さも幅も現代日本人との差は余りなし。示数は大で中頭ではあるが短頭に近い。

頭の高さは余り高くない。顔の横幅も下顎角幅も広い。顔の長さは長いとは言えない。眉間の突出は余り強くないが、外後頭結節は突出している。頭蓋縫合は癒着せるも、痕跡明に残っている。レ線写真によって、甲状腺が少し化骨を起す（老人性変化）。歯牙は脱落し、歯槽突起の萎縮が見られる。気管又は食道、恐らく気管の中に大臼歯2本が落ち込んでいる。歯牙の咬耗及び脱落により60才をすぎたと考えてよい。頸椎は彎曲が少ない。脳は空虚である。併しぬき取ったという事では無いらしい。

頭髮及び髭が見られる。

### 5. 胸部、腹部、骨盤部

全体に充填した石灰がつめてある。

下腹部に長さ18cmの下を向けた弧状切創があり麻糸で13針縫合している。骨盤下口は全く開口され、石灰が落ちている。多分肛門は切り取ったのでは無いかと思う。

陰茎2cm位残存している。断端は丸くなっているが鼠害かも知れない。陰嚢は存在している。中腹部で肋骨弓のすぐ下部に横断せる一直線の浅溝あり、その上下の皮膚はのびて布目が見られる。着物の上から縛られた証である。体腔内の石灰のため脊椎に老人性の変化ありや否や不明である。脊柱は弓状をなしている。胸椎の部分が彎曲が大

である。

## 6. 上肢

右肘関節70°で手首を下げ左肘関節90°で手首を上げている。上肢は概ね繊細である。

## 7. 下肢

発達良好であるが長さは余り長いとは考えられない。左大腿骨の上内側に大型の外骨腫なる良性腫瘍が見られる。

## 8. 血液型、指、その他の皮膚理紋型

最もよく指紋が採取し得た例である。左オI指採取せるも不明、左オII指渦状紋、左III指渦状紋か否か不明。右オI指弓状紋らしいが不明 右オIII指採取せるも不明。一明確なのは左オII指である。

血液型はA型であった。

## 9. 備考

皮下脂肪は極めて少量であったろう。左大腿部の外骨腫は良性なるがゆえに大した障害は無いと思う。筋肉の萎縮もつよい。石灰充填の爲保存極めて良好である。60才を過ぎた老人であろう。

# Ⅲ 鉄門海上人

## 1. 保存状態

保存悪く、外皮、軟部も虫、虫害極めて強し。顔面は前頭部より両側頬部、鼻部より下顎部前部に掛けて、黒色の漆の如きものが塗布せられて恰も顔面軟部の如く見える。その部分表面に“とのこ”らしいものがぬってある。背部の保存はよい。特に骨盤部、下肢の保存は悪い。腹腔内よりクマネズミの脊柱一本を発見せり。

## 2. 外皮一般

顔面の補修以外の部分は黒褐色を呈している。体表に附着せる赤粉は赤染せられたる動物性繊維であろう。

## 3. 身長、体重

身長164.57cmで上肢の発達より下肢の方が極めてよく発達している。

体重は5.0kgである。

## 4. 頭頸部

頭骨最大長	176	} 頭骨長幅示数	76.7
頭骨最大幅	135		

長、巾とも大きくは無く、中頭の内では長頭に近い頭型を示す。頭の高さは高い方ではない。歯牙は生前脱落せるものもあるし、死後のものもあり、生前のものは歯槽の萎縮を見る。咬耗は軽度である。顔の長さは少しく長く、頬骨弓幅は中程度下顎角幅は少し張っている。頭はⅢ-Ⅳ頸椎間で折れて、全く離断していて、針金又は紐で引っぱられている。頭蓋の縫合は殆ど癒着している。顎鬚と思われる一束を持参せるものあり。鼻腔及び左右上顎洞内に



楕円形の石灰沈着を見る

## 5. 胸部、腹部、骨盤部

胸部も単害甚大であるが、横隔膜の一部及び左側肺が乾燥して残っている。腹壁は残存せる切創はない。胸椎の下部が弯曲強く、弓状をなしている。

陰茎は中断されていて、断端は鈍である。同上人の陰囊と称するものは南岳寺にあり。即ち、骨盤部の破損が強いためである。前胸部に略て左右対称の方向にむかって肋骨の方向と約直角に下外方より上内方に向う皮膚上の浅溝あり、右側長さ7.5cm幅1.0cm、左側長さ8.5cm、巾1.0cmありこれは後胸部には見られない。

脊椎に変形性脊椎症を見る。

## 6. 上肢

右肩関節、肘関節は全くはづれ、布又は針金で補修している。左側は割合によし。左右側、肘関節は殆ど直角にまげて腕関節はのばしている。

手掌には柵掛溝は見られないが浅溝多数あり、女性的又は老人性の萎縮が見られる。上腕骨も可成り発達がよい。

## 7. 下肢

下肢に於ては胫骨断面が三角形で大腿骨は丸いが上肢と比較すれば非常によく発達している。

膝関節、足関節はよく保存されているが股関節は全く、はづれて針金で補修している。足底よりは皮膚隆起線がとれなかった。

## 8. 血液型及び指紋

指紋は

手型→
 

V	IV	左 III	II	I		I	II	右 III	IV	V
U	W	U	U	U		U	U	W	W	U

U：尺骨側蹄状紋  
 W：渦状紋

手型と一致して  
 いると考えてよい。

石膏で全く同一型を検出。

明確ならざるも隆線が類似す。(石膏)。

日本人として余り特殊な指紋ではなく、手型のそれと一致す。血液型はB型である。

## 9. 備考

破損最も強い。その他顔が修理してあり、索溝を著明に見る。足部の発達よろしい。60才以上の老人と考えられる。手型と石膏よりの所見と一致していると考えてよい。

## IV 眞如海上人

### 1. 保存状態

可成り良好なるも、前頸部及び骨盤下口等には欠損があり、中は単及び虫害が大である。頭部には少しく軟部の剥離を見るが少部分である。

## 2. 外皮一般

黒褐色を呈し表面到る所に星状の0.5cm円外の白色の菌が無数附着している。頭部は黒色を呈している。

## 3. 身長、体重

身長は159.6cmで、上、下肢特に発達した部分はない。

体重6.0kgである

## 4. 頭頸部

頭骨最大長 182	}	頭骨長幅示数 79.12
頭骨最大幅 144		

巾が少し広い程度で、その他は変りなく中頭の内短頭に近い方に屈している。頭の高さは高くはなく、顔も長くはない。頬骨弓幅と下顎角幅では大分広く、割合に横に広い顔である。歯牙は全部脱落し、歯槽突起の萎縮が強い。頭蓋縫合は少しく痕跡を見るが殆ど癒着している。可成りの老人と考えられる。左側眼球は無くなっているが右側では前部ばかり無く後半部は残存している。

外後頭隆起及び眉間の発達がよい。左側の眉毛は少し残存している。乳様突起の突出は極めて強い。

## 5. 胸部、腹部、骨盤部

脊柱の弯曲が極めて強い。皮膚が何等、縄目を見ない。兎は胸廊上口と骨盤下口とより出入していた、めその部分が破損している。肛門より見れば、膀胱が前壁に附着しており蠅の（ヒメイエバエ）卵の附着あり。又クマネズミのミイラがあった。

横隔膜の左側を確認し、その他、内臓が見られた。陰茎及び陰囊は見られない。陰毛が残存している。右胸部の前面IV肋間に、この肋骨の方向に長さ6.3cm、中1.1cmの浅い溝がある。これは兎害かもしれぬが、或は縄目かも知れない。脊椎に老人性変化が見られる。即ち変形性脊椎症が見られる。鎖骨は大型では無い。左肩甲骨に5個の楕円形の石灰沈着がある。

## 6. 上肢

右肘関節120°、左肘関節145°の位置にあり、腕関節は少し屈曲している。指先は兎にやられている。特に発達が強いとは言えない。

## 7. 下肢

胫骨は扁平ならず、大腿骨も強大とは言えない。足部は兎害が特に強い。右大腿骨の小轉子の部分に4個の楕円形の石灰沈着を見る。

## 8. 血液型及指

手掌、足底より皮膚隆起線が見られない。血液型はAB型を示している。

## 9. 備考

身長は少しく高く、頭顔部に特徴は見られない。上肢、下肢の発達は普通である。背部の弯曲がとくに強く、左



肩甲骨に石灰の沈着を見る。手は伸している。

外面の虫害大である。可成りの老人と考えられる。

## V 忠海上人

### 1. 保存状態

本ミイラは単、虫害が強いが寧ろ湿気による破損が極めて強い。頸部の軟部欠損はつよく、顔面部の上口唇部及び下口唇の右側には黒色物による補修あり、左腕関節以下は無くなっている。背部には厚板を背負い縄で縛って形を作っている。下腹部より骨盤その他床に附着せる部分は湿気による破損が極めて強い。左前腕部は副木があり、それも下から支えられている。宝冠から外へ出た顔面部には墨がぬってある。

### 2. 外皮一般

全身は黒褐色であるが塗ったものではないらしい。

顔面には墨をぬっているので黒い。

### 3. 身長、体重

身長158.97cmで足に比して手の方が発達よし。寧ろ胴部が長い事が知られる。体重は6.0kgで軽い方である。

### 4. 頭頸部

頭骨最大長	182	}	頭骨長幅示数	71.42
頭骨最大巾	130			

最大長は幾分長目で、最大巾は極めて短い方であるので示数は長頭の内でも極めて長い方に属している。顔の長さは長い方であり、頭の高さは高い。頬骨弓幅も下顎角幅も大きく、故に顔全体の大きい人である。

顔面の軟部が落ちた爲に補<sup>ママ</sup>習及び墨が塗ってある。墨は前額部より側頭部に及んでいる。

上顎の歯槽突起は萎縮強し。左側下顎の臼歯が脱落して口腔内に落ちこんでいる。

冠状、人字縫合は少くとも、外板に於て癒着は行われない。

下顎の歯牙の咬耗は余り強くない。

脳は認められず脳頭蓋内は空虚と考えられる。

頸椎は弯曲は殆ど認められない、即ち頭部の前傾が殆どない。右側頭部に頭髮を見る。眼瞼裂は見得るも眼球の存在は不明である。鼻軟骨は萎縮せるも残存す。

### 5. 胸部、腹部、骨盤部

腹腔内にクマネズミのミイラ1個あり、これにヒメマルカツオブシムシのサナギが多くついていた。その他蛾のサナギ、甲虫等あり、腹部に2本（1本は不明確）胸部に二本の索溝を見る。これには布片が附着している。板に密着して縄で縛られていたが背部外皮が扁平とはならぬ。これはミイラ成立の時のものらしい。然し、他の場合と比して弯曲は少ないがⅣ－Ⅴ胸椎の部分が最も弯曲している。肋骨も単虫つよし。

胸椎部で脊柱は右側弯を示している。坐位は後に125°傾いている。

脊椎に老人性の変形性脊椎症を見る。

## 6. 上肢

右肘関節90°、左肘関節70°にまげている。右の腕関節以下は消失している。  
左前腕部には副木が当てられ支え木で前方に出してある。針金で副木がしめてある。この補修は最近行われたらしい。上肢の発達は極めて良好である。左中指才Ⅲ節は無い。保存は不良である。

## 7. 下肢

上肢の発達に比して下肢は弱い。太さも細く、且つ繊細な感をうける。  
濕気による保存は不良なるも股関節ははずれるまでに至っていない。床部に密着していない部分は軟部はよく残存している。

## 8. 血液型及指紋

皮膚隆起線は手掌、足底より採取出来なかった。ABO 式で血液型 A 型を検出した。

## 9. 備考

他の即身佛に比して、次の円明海上人と共に皮下脂肪層、筋肉等の萎縮が比較的少ない。やはり、50才代の若さによるものと思われる。極めて長頭であり、上肢より下肢の方が発達がよい。胸腹部に線條痕を見る事、補修のある事、姿勢を作っている事等、特殊な場合と考えられる。血液型は A 型である。

# VI 円明海上人

## 1. 保存状態

鼠害、虫害それに濕気による破損が強い。床に密着する部分は極めて腐蝕が強く、水分を含んでいる。  
全身に柿渋を塗っている。  
上腕は両側共に3ヶ所、右前腕の肘関節寄りの所に1ヶ所、左前腕部には2ヶ所麻糸によって締めてある。左上腕の麻糸の一本は長く編んで下げてある。この意味は解らない。この補修の後に柿渋を全身に塗布せりと思う。  
大腿部は右3ヶ所、左5ヶ所同様に麻糸で締めてある。この様に補修せるも胸部には鼠による咬傷がある。右側頬部より右口角にかけて補修されてある。胸部、腹部、上腕、大腿部には白い晒木綿が巻いてあった。

## 2. 外皮一般

外皮は柿渋によって黒褐色になっているが忠海上人とその色調は殆ど同様である。床に向った部分は塗っていないので黒灰色を呈している。これには索溝を認めない。

## 3. 身長、体重

この人が最も大柄で、167.37cmで日本人としては長身に属す。上肢の方が下肢より発達がよい。  
体重は6.8kgである。……生前未だ痩せ切っていなかったと思う。

## 4. 頭頸部

頭骨最大長	181	} 頭骨長幅示数	83.4
頭骨最大巾	151		

最大長は日本人としては普通であるが最大巾が広い方に屈している所以示数は大で短顔である。頭の高さは可成り高い。顔の長さは普通で頬骨弓幅は広い方である。顔面の補修の部分に白い菌類が生えていたので10%のフオルマリンで清拭した。左耳介は殆ど無い。右の方は割合よく残っている。両側の眉毛がある。左側頬部に髯を見る。前より上下顎の門歯と右上顎犬歯が死後脱落しているのが見られる。下顎の左右側の大臼歯の部分が生前脱落して歯槽突起の萎縮を見る。残存歯の咬耗はあるが余り進んでいない。頭蓋はⅠ、Ⅱ頸椎の部分で後方に屈曲して一見脱臼の如し。脳頭蓋の内容は見られない。歯牙の咬耗は著明である。頭蓋縫合は殆ど癒着している。

## 5. 胸部、腹部、骨盤部

兎害によって肋骨も破損されている。右側胸部、左前胸部に兎よる咬傷を2個見る。胸部も広く、頑健である。内臓は無いらしい。脊柱はオV腰椎の部分で余り弯曲が強いので椎体がつぶれている。全体として弯曲特に強い。老人に見る変形性脊椎症が見られる。皮膚に何等索溝の跡を見ない。

## 6. 上肢

上腕及び前腕の上部は補修されているので形は整っている。  
右肘関節60°、左肘関節80°の位置で手掌を上にして左右側が大腿の上ののせている。  
下肢に比して上肢の発達が良好である。併し他の即身佛に比して非常に強大である。  
皮下脂肪及び筋肉は未だ萎縮が少ない。

## 7. 下肢

下肢の発達より上肢の方がよいが、下肢も他に比して強大である。床部に附着せざる足底の部分は保存極めて良好なり。皮下脂肪及び筋は萎縮が少なく太い。

## 8. 血液型及び指紋

指紋等は殆ど採取し得ず、右Ⅱ指は一部分辛じて石膏にて採取せるも判別不明。血液型は再三試験を行ったが残念乍ら判定不能であった。

## 9. 備考

本上人は極めて頑丈且つ大型であって皮下脂肪、その他筋等の萎縮は少ない。故に飢餓修業も困難であったと考えられる。日本人としても大きな方である。顔面も忠海上人同様に補修あり。50～60才と考えてよいと思う 湿気及び兎害が強い。

# Ⅶ 全海上人

## 1. 保存状態

兎害さえ無ければ可成り良好であったと思われる。本佛は入定当時のものと思われる黒褐色（当時は白であったろう）の木綿の襦袢を着、足袋をはき、合掌している。両腕関節の部分を縛ってあった。これは当時のものと思われるのは腋窩部などは両方の皮膚と密着して脱がせる事が出来ずやむを得ず鋏で切り取った。

下顎部、頭蓋底よりオ1、2頸椎の部分は兎害強く、椎間軟骨及び靱帯、よって漸く頭蓋を支えている如し。左鎖骨上窩より兎が胸腔内へ入った孔がある、腹部も兎の孔がある。床部に附着している部分も比較的保存良好であ

る。左腋窩に近い背部（Ⅱ～Ⅲ肋骨間）に鼠の孔を見る。腹腔内にクマネズミ 2 体廿日鼠 2 体及びキンバエの幼虫の殻を見る。

## 2. 外皮一般

茶褐色の部分もあるが黒褐色が強い。特に頭部には褐色の斑点が多く見られる。右膝関節の軟骨が露出していて、赤味がかった部分あり。他に塗布されたものは無い様である。

## 3. 身長、体重

159.68cmで低い方である。特徴は下肢の長さが上肢のそれに比して極めて短い事であろう。併し頑丈ではある。体重7.0kgである。これは骨組が頑強であるからであろう。

## 4. 頭頸部

頭骨最大長	195	} この値は共に大なるもので示数は74.36
頭骨最大巾	145	

となり、長頭に屈している。頭は非常に大きい事が知られる。頭の高さは中等度であり、顔の長さは寧ろ短いと思われる。頬骨弓幅大であり、下顎角幅も大きく、従って横に広い事が知られる。軟部の残っているのは顔面の上部で、下部は鼠害で消失している。

左右側の眼瞼は閉じていて右側は少し破損している。眼球の存在は不明である。頭蓋縫合は殆ど癒合している。歯牙の咬耗強く、恐らく齧歯による歯根嚢腫を見る部分もある。右眼窩の底部に7個の楕円形の石灰沈着を見る。左右上顎の上顎洞内に楕円形の石灰沈着多数を認める。

## 5. 胸部、腹部、骨盤部

上体は左傾している。脊柱は後弯つよいが頸椎はむしろ直線に近い。胸椎の下部の弯曲が特に強い事が知られる。→それに右側弯が加わる。肋骨弓の下で中腹部に横に陥没があるが、これは紐、縄によるものか否か解らない。胸廓も頑健である。骨盤部は比較的保存良好で陰茎及び陰嚢の残存を見る。後者は鉄門海上人のものと類似している。

亀頭は見られない、鼠害の爲と思われる。陰毛が著明に見られる。→直毛の如し。

変形性脊椎症あり。

## 6. 上肢

左右側肘関節は約80°にまげ、前方で少し右側に扁平合掌位をとっている。保存良好で、指部は軟部が脱落している。腕関節が左右側共に紐で縄ってある。上肢の発達は良好である。

## 7. 下肢

下肢は鼠による咬傷が多い。右大腿部内側は腐蝕して、血管及び神経が露出している。この部分は黒褐色を呈している。下肢骨は短いが頑丈である。

## 8. 血液型及び指紋

手掌、足底より理紋を検出する事は出来ない。

血液型はO型を検出した。

## 9. 備考

頭は大型で長頭である。上肢の長さに比して下肢の長さが短い事、入定時の衣服を纏っている事、形成にある程度の加工が施されている事等は興味深い。

眼窩内に楕円形の石灰沈着を見る。85才としては歯牙の残存が多い方である。

# Ⅷ 富田子之吉

## 1. 保存状態

極めて良好ではあるが眼窩の上半より頭蓋冠の部分は頭骨が完全に露出している。右上腕より肘関節にかけて軟部が破損しているが、これは何かの故意の損傷の如く思われる。右手Ⅱ、Ⅲ指の基節の本から鋭利なる刃物で切断されている。

## 2. 外皮一般

皮膚の隆起及び深溝が多い。黒灰色で褐色も少し加わる。

## 3. 形質所見（記録では満3才という）

頭骨最大長 167mm これは非常に大きい。7～8才位

頭骨最大巾 127mmである。体重は1024gなり 頭の高さも3才にしては低い。坐高は459mmで1/2～1才位の所にある。即ち3才としては頭骨最大長が大きい方で最大巾は寧ろ小さい。顔の長さ横幅は小さい。即ち顔は小さい。

才1大臼歯（永久歯）の歯冠完成。門歯の歯冠完成。併し末萌出である。

前頭骨正中は完成、Ⅱ－Ⅴ足指骨基端の化骨核は見られ、腓骨下端のそれも見られる。併し、橈骨下端の化骨核は見られない。故に3才以上、5才以下である事を知る。眼窩の内容は消失している。

正坐位をとり左肘関節110°、右肘関節80°である。手部は開いている。

体位は少し前傾且つ、左傾位である。

側頭部の結締組織がよく見える。

頭蓋内腔には何も無い。胸、腹、骨盤部の内容は存在するようである

肛門には損傷を受けていない。

頭蓋縫合は著明に見られ癒合は全くない。頭部には頭髮の一部を見る

陰囊及び陰茎が著明に残存している。爪もある。

## マ 3. 血液型及び指紋

皮膚理紋型（又は条）は採取不能である。血液型も数回の検査を経るも遂に検出不能であった。

#### ママ 4. 備考

保存極めて良好な自然ミイラである。現代日本人に比して頭蓋最大長は極めて大であるが、その他は小さい。この中には生体と比較しているものもあり尚検討を必要とする。概ね4才という記録は正しいと思われる。頭蓋冠の部分の軟部は無く、左Ⅱ、Ⅲ指が基節より切断されている事などは注意すべきであろう。

### IX 舜義上人

#### 1. 保存状態

比較的良好であるが矢張り単害が甚大である。

全体として虫その他の腐蝕は進んでいない。胸部に2ヶ所、左右側腹部、その他左大腿部に単の咬傷がある。これより体腔内に入ったと考えられる。

#### 2. 外皮一般

黒褐色を呈していて、外皮には索溝その他を認めない。

白色の菌類を見る。

#### 3. 身長、体重

身長は157.65cmで低い方に屈している。前腕部が長い事以外には特色はない。

体重は4.125kgである

#### 4. 頭頸部

頭骨最大長 193 長い方に屈している

頭骨最大巾 145 少し広い方である

示数は75.65となり、長頭に近い中頭である。頭の高さは現代人より低い。

齒槽突起が萎縮しているのと、口を開いているので顔の長さは鮮らないが長い方ではない。頬骨弓幅及び下顎角幅は大きい爲に横に広い顔である。

極めて不自然な姿勢をとっていた爲に才Ⅲ、Ⅳ頸椎の間で強い脱臼を越し、頭部は右方に強力にまげられる。皮膚も切れてⅢ頸椎の椎体上面が露出している。

頭蓋内容は見られない。頭蓋縫合は殆ど癒合している。

歯牙は生前殆ど脱落している。下顎才2門歯は数10年以前まではあったと言うが、齒槽が見られる。右下顎Ⅱ、Ⅲ大臼歯の齒槽が未だ完全に閉鎖せず残っている。頭部の頭髮が見られる。頭蓋表面には軟部の欠損部があるがこれは胎内に入れられた時か否かは不明である。眼瞼は閉じて眼窩は強く陥没している 外鼻は殆ど見られぬ。眉毛が多く残っている。

#### 5. 胸部、腹部、骨盤部

股関節は殆ど0°に近く屈曲している。故に体部は強い前傾姿勢をとる。

全体として極めて頑丈である。特に鎖骨の大きさは稀に見る位である。

胸、腰椎部が後弯強し。骨盤下口は大きく開き中には内臓が見られない。

内側の筋肉の破片が見られる。変形性脊椎症あり。



## 6. 上肢

上腕は体軸と殆ど平行であるが体の前傾と同時に肘関節は強く屈曲して下方にむけて手掌を合せ、手指を組んでいる。この手部その他は兎の害が大である。

## 7. 下肢

極めて頑丈である。長大ではないが強い。兎に足、背を食われる。床部に附着せる部分も破損が余りつよくない。

## 8. 血液型及び指紋

右オ I 指は明確には鮮らぬが、橈骨側蹄状紋かもしれない。

血液型は O 型と断定している。

## 9. 備考

本例は極めて特殊な例で、ミイラ作製上多くの示唆を含んでいる。即ち股関節を 0° に近くまげて、体を 2 つ折りにし然も頭頸部は上方に向ける形である。

手は前方に組んでいる。これは狭い空間を利用した形であるし、オⅢ、Ⅳ頸椎間に脱臼があるが、これは恐らく胎内に入れる時の外力によると考えてよい。口はその時に既に開けていたものと考えられる。極めて頑丈な体格の持主であって、鎖骨の強大さは稀に見るところである。兎の害也大である。もし明確であるならば右オ I 指肚に見られる橈骨側蹄状紋は日本人としては稀のものである。可成りの老人である。

### ③ ミイラ関係文献ノート（年代不詳）

寂年	入定者	出身	入定地	入定方法・特徴	文献
太康元 280	康僧會				宋傳
元康八 298	譚羅竭	樊陽	止婁山	火葬シタルモ半焼ケ 後石室ニ移ス	梁傳
昇平三頃 359 百余歳	單道開	燉煌	羅浮山の山舎	絶穀. 栢實. 松脂. 細石子. 薑椒ヲ服ス□七年. 石□	梁傳
	慧直	印度人カ 姓竺	武陵平山	絶粒. タダ松栢ヲ餌ス	梁傳
太元末 390 頃	曇猷	燉煌	始豊赤城山山室	少苦行習禪定 舉体綠色 建元中慧明尸骸不朽現ル	梁傳
太元末 390 年代 百十歳	帛僧光	不明	剡の石城山		梁傳
開皇十七 597 六十七	智顗	潁川	天台山大石像前	端坐如定而卒. 枯骸特立端 坐如生. 瘞以石門関以金鎖	續傳 17
武德五 622 七十七	慧超	円陽建元		露骸一月余. 顔色不変 ノチ白塔ヲ建ツ	續傳

寂年	入定者	出身	入定地	入定方法・特徴	文献
貞觀三 629	道休	不明	雍州新豐 驪山ノ谷	飯鉢ニ満ツルニ随テ食ス、七日一食 カクノ如キコト四十年余、加漆布	續傳
貞觀六 632 六十一	法喜	襄陽	驪山南阜郷廬陵		續傳 19
貞觀八 634	慧達	太原	驪山		續傳
貞觀十七以后 643 七十七	僧徹	河東万泉	蒲州孤介山	靈山崖ニ移シ三年后易簣 加漆布	續傳 20
貞觀十四 640 八十四	法順	雍州萬年		鑿穴處之、後龕内ニ藏ス	續傳 25
貞觀十五 641 六十六	慧震		梓州通泉寺	作石塔 龕安繩牀、	續傳 29
貞觀十六年 642 七十五	僧辯	南陽人	長安弘福寺	夏、停屍ニ旬、形色不變、 鑿土為龕	續傳 15
貞觀十九年 645 六十三	世瑜	始州ニ住ス	益州榮樂寺	山居三年食米一石七斗 食山果・蔗芋 作龕坐之	續傳 20
永徽四年 651 七十二	道信	不明	蘄州雙峯山	塔ニ入り端生、ノチ本處ニ移ス	續傳 20
七世紀後半 七十二	義忠	潞州襄垣	河東 高岡		
上元二年 675 七十四	弘忍	潯陽一云黄梅	蘄州東山	肉身墮涙如雨 塔ニ入ル	宋傳
万歲通天 以後 690—	華嚴和尚				宋傳
景竜四 710 八十三	僧伽		真身塔		宋傳
先天二 713 七十六	慧能	南海新興		後加漆布	宋傳
開元廿三 735 九十九	善无畏		洛陽	遺形漸加縮少	宋傳
天宝元 742	懷玉				宋傳
至德中 756・757	辯才		朔方竜興寺	漆布	宋傳
上元三 762	無漏	新羅	朔方靈武下院	安置別堂	宋傳
大歷十三 778 七十二	道隱	彭原	寧州南山二聖院		宋傳

寂年	入定者	出身	入定地	入定方法・特徴	文献
大歴十三以后 778	辯真		寧州南山二聖院	入塔	宋傳
大歴以後 766-779	道悟	不明	温州陶山	葬後五年忽挙右手. 状若傳香	宋傳
貞元八 792 七十九	法欽	崑山	杭州龍興寺		宋傳
元和中の人 800 頃	法普	廬江		塗香泥	宋傳
貞元十九 803 九十九	地藏	新羅	九華山	鐘ヲ扣リ. 函中ニ置リ三年目開函	宋傳
	代病				
	幽玄				
会昌以前 百十八	寶安	姑蘇常熟	嘉禾靈光寺	布漆 会昌毀寺遂焚之	宋傳
	全亮				
	慧普				
咸通二 861	遂端				
文徳元 888 七十	楚南				宋傳
乾寧二 895 八十五	圓紹	滑臺	洛陽封禪寺	建塔	宋傳
光化三年 900 八十	文喜	嘉禾禦兒			宋傳
梁時代の人 907-922 頃 九十三	存壽	不明	河中府棲巖山	一月後髭髮再生. 重剃入塔	宋傳
同光三 925	無迹	朔方		布漆	宋傳
長興中 930-933	聶光	永嘉	甬東	葬後三年. 発棺 儼然若生相 髭髮爪皆長	
乾祐三 950	行脩	泉州		加漆布	
開宝初年 968 不明	王羅漢	不明	明州乾符寺	三日後漆布	宋傳
開宝中 968-975	道因	不明			宋傳

## むすびにかえて

奇しくも昨年11月、国立科学博物館にて「ミイラ『永遠の命を求めて』」展が開催された。同展には日本のミイラとして即身仏が紹介され、安藤ら日本ミイラ研究グループによる功績も示された。日本ミイラ研究グループは、安藤を初代委員長としたのち、二代目を新潟大学教授の小片保、三代目を早稲田大学教授の桜井清彦が受け継ぎ、昭和女子大学教授の松本昭、聖マリアンナ医科大学教授の森本岩太郎らにより発展をみてきた。しかしながら、その後の進展は途絶えているのが現状である。

早稲田大学におけるミイラ研究については、同じく會津を師とした早稲田大学教授・小杉一雄の論文「肉身像及遺灰像の研究」（『東洋学報』24（2）、東洋文庫、1937年）や「鑑真和上の肉身像説と朱櫃入定説」（『史観』14、早稲田大学史学会、1938年）が端緒となったことや、1961年3月には東京都青梅市から無際大師（伝・石頭希遷）のミイラを安藤研究室に引き取り調査したことも付記しておきたい。本学がいち早く日本のミイラに学術的価値を見出し、調査を行った功績は大きいといえよう。

さいごに、今回のミイラ研究資料データ化においては、アン・ラファン氏に多大なご協力を賜った。ここに深謝申しあげるとともに、当館所蔵資料が同氏作品へ寄与することを願いたい。

### 主要参考文献

安藤更生年譜作成委員会編輯『安藤更生年譜・著作目録』、安藤きよ発行、1972年

安藤更生『日本のミイラ』、毎日新聞社、1961年

加藤克知「日本ミイラ研究グループによる入定ミイラの研究—概観と課題—」、篠田謙一・坂上和弘監修『特別展 ミイラ—「永遠の命」を求めて』、於：国立科学博物館、TBS テレビ、2019年

日本ミイラ研究グループ編『日本ミイラの研究』、平凡社、1969年

日本ミイラ研究グループ編『日本・中国ミイラ信仰の研究』、平凡社、1993年

早稲田大学會津八一記念博物館、徳泉さち編『會津八一と安藤更生——學藝の継承』、早稲田大学會津八一記念博物館、2016年